生存科学研究ニュース

VOL. 15. NO. 2　2000. 3. 10発行

発行　財団法人　生存科学研究所

〒104-0061　東京都中央区銀座4-5-1
電話　03-3563-3518　FAX 03-3567-3608

平成11年度第5回常務理事会

平成12年1月13日（木）午後2時から生存科学研究所会議室において表記の会議が開催され、下記の項目について討議された。

（1）事業計画のたて方について
（2）平成12年度予算の基本方針について
（3）事業計画変更届について
（4）資金運用について
（5）その他

拡大3役会

平成12年2月1日（木）午後2時より平成11年度拡大3役会（理事長・副理事長・専務理事・研究評価担当理事）が、生存科学研究所会議室で開催され、下記の項目について検討された。

（1）平成11年度事業の研究会報告の評価
（2）平成11年度の研究事業として申請された研究会等の内容と予算
（3）その他

第3回理事会・第2回評議員会

平成12年2月17日（木）午後2時から教文館会議室において表記の会議が開催された。

まず理事会が行われ、江見理事長が議長に就任し、来年度の基本方針について説明があったあと、来年度の事業計画ならびに予算について討議がなされ、原案通り議決され了承された。引き続き、向山評議員が議長に選ばれ評議員会が開催され、理事会の議決が承認された。

平成12年度事業計画は下記のとおり。

記

自主研究事業

A.　川崎病研究会
B.　生存学研究会
C.　21世紀医療システム研究会
D.　21世紀世界の文明と生存の研究会
E.　銀座ナイトセミナー
F.　21世紀における生存科学としてのﾊﾞｲｵｴｼｯｸｽの構築

G.　形態生存医学研究会

H.　自主研究中長期基本構想委員会

共同研究事業

A.　日本川崎病研究センター

B.　レオンチェフ文庫

広報活動事業

A.　シンポジウム・生存科学講座

B.　生存科学研究ニュース

学術研究誌発行事業

A.　学術誌『生存科学』

受託事業

A.　個人毎の健康度と疾病リスクの研究

B.　地球環境リスク管理研究

以上

21世紀世界の文明と生存の研究会報告

平成12年1月19日（土）午後6時より生存科学研究所会議室において表記研究会が開催された。

テーマは

1）エイズと“疫学”（木原　正博）

2）栄養問題の諸相（山本　茂）

木原氏は、最近の研究分野であるエイズ研究について、疫学を見直しながらの実践的研究の話をされた。また山本氏は栄養問題について多角的な面からとらえた話をされた。

エイズは1981年以来、ほとんど世界的に流行している。木原氏によれば、そこには、大別して4通りの型があるという。すなわち欧米型、アジア型、アフリカ型、日本型である。このうち、わが国の型は現在のところ発症が少ないのが特徴である。しかし、21世紀に入って急激に増加・流行する可能性が強いと指摘された。その背景にはわが国の保健医療構造の特質、ならびに若年者の性行動の変化があり、今後10年間ほどは予断を許さないそうである。また、研究者として、エイズの疫学的研究に入っていったときに、社会的に疾患として認知されている循環器疾患やがんの研究とはまったく異なる困難があったという、現場での調査の苦労だけでなく方法論的な問題点にまで及ぶ新鮮な話を聞くことが出来た。

次に、山本氏は日本の栄養問題が単に脂質の摂取過剰にあるかのように言われることがあるが、それは当を得ていないのではないかという疑問の提起から始められた。日本では米の摂取量が減少し、身体の筋量の低下、基礎代謝の低下、それとともに体脂肪の増加という現象が起きており、問題は脂質にあるというよりはむしろ運動の不足や、さらにはタンパク質の過剰摂取が問題なのではないかという指摘をされた。

栄養不足に対応できるための身体の機構として省エネ機構が作られてきたが、現代の食事の状況はその機構が逆効果となっている。近年は子供のアトピーが増加している。歴史的に「ごちそう」というものは高タンパクの食物を指していたようだが、タンパク質の下限ではなく、いまや上限の設定が必要になってきている状況である。現代ならびに将来の日本の栄養問題は広く文明問題としてとらえ直される必要があろうと話された。

これら二つの話題提供ののち、フリーディ

スカッションに入り、参加メンバーによる活発な質疑応答があり、熱心な議論が長時間にわたって続けられた。（丸井英二）

生存科学研究講座打ち合わせ会

平成12年1月19日（土）午後4時より生存科学研究所会議室において表記打ち合わせ会が開催された。

過去2年間の実績を振り返り、平成12年度の講座の進め方について話し合った。

その結果、講座の開催は本年度同様、年3回とし、『高齢社会』をテーマとして、

①経済（老後とお金）

②地域、環境、生活情報(理想の終の住処とは)

③健康投資（健やかな老後）

の3つの切り口が提案された。

（小島靜二）

第6回銀座ナイトセミナー報告

第6回銀座ナイトセミナー「生きる」シリーズが、2000年2月25日（金）18時より、生存科学研究所会議室で開かれた。「土木技術研究者の生きる」と題して日本大学生物資源科学部教授の岡本雅美氏による報告がなされた。

公共土木事業のうち特に河川との関わりを中心に話された。公共土木は財源が全て公費、つまり税金から出ているという点に特性がある。日本中どこでも同じという公平性や互いの事業の整合性、そして技術的合理性があることなどが求められる。ただ、河川事業の場合、計画の妥当性から施工、効果の判断からアセスまで、そのすべてを行政が行うという点に大きな特色がある。いってみれば、判事も検事も弁護士も、時には犯人から警察まで全部行政が自分でやるということである。

ダムなどは一度できあがってしまうと、その効果の評価ということは行わない。外部からはおろか、造った本人の評価すらない。元々そこのみの「現地一品生産」なので受益者側が他と比較するということもできないので、市場原理も働かない。つまり、ダムの計画と建設、また、その効果については、客観的判断がしにくいということだ。

「国家無謬説」を取る日本で、土木学者の側から政府の土木事業への批判が出ることはほとんどなかった。例えば、裁判となった長良川の水害裁判では、某国立大学の助教授が反政府側に立ったと見なされ、すぐにその上の教授が建設省に呼び出され、助教授共々関係機関を陳謝してまわった。成田空港のパイプラインが自宅近くを通ることになったのに反対した助教授もいたが、彼はそのまま万年助教授で終わった。

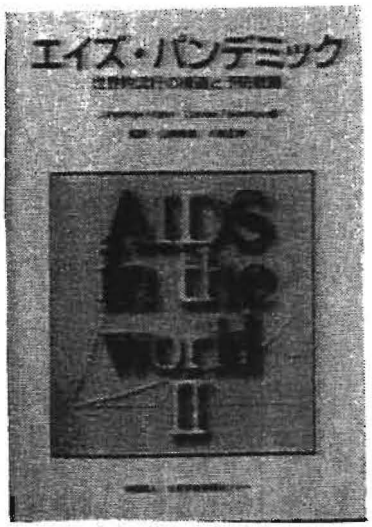
岡本氏の講演の後、医療行政や医学会に対し長年鋭い批判を行ってきた高橋晄正氏の口から「私は医学の方で、まだよかった」という感想が漏れた。非常に生きにくそうな土木業界の中で、干されてパージすれすれとはなったが、政府べったりになるわけでもなく、特定の住民運動にも加わらず、「事業について賛成か反対かの表明は一切行わず、造ればこうなるが造らなければこうなる、という客観的なデータだけを提示する」という独特のスタンスをずっと貫いてこられ、「建設省と住民が参加するシンポジウムの司会が決

まらなくて困っている、あなたしかできないのでやってくれと役人から頼まれた。その理由は、両者から敵と思われているのは、あなたしかいないから、ということだった」と語る岡本氏の飄々とした態度が印象に残った。

（久保田裕/津谷喜一郎）

寄贈図書

エイズ・パンデミック
-世界的流行の構造と予防戦略-



ジョナサン・マン
ダニエル・タラントゥーラ編
山崎修道
木原正博　監訳
1998年10月発行
発行所
日本学会事務センター
定価4,700円+税

生命医学倫理のフロンティア

トム・L・ビーチャム著
立木教夫
永安幸正　監訳
1999年10月発行
発行所
株式会社 行人社
定価1,800円+税

……のっぴきならない「いのち」をいかに取り扱うか…という切迫した領域における倫理は、社会の全員が同じように真剣な討論と学習に参加すべきものです。（「訳者あとがき」より）

編集小委員会

平成12年2月3日（木）午前10時30分より生存科学研究所会議室において表記委員会が開催され、第11巻Aの編集と第11巻Bの原稿募集などについて検討しました。

編集委員会では会員の皆様からの投稿ならびにご意見をお待ちしています。

生存科学A（毎年3月31日締切）は自由な意見の発表の場として、また、B（毎年9月30日締切）は論文・研究ノート等、学術的な内容を主としており、論文は査読制度を採用しております。研究発表の場として奮って投稿下さるようお願いいたします。

研究所日報

1月13日（木）	第5回常務理事会
1月29日（土）	生存科学講座打ち合わせ
1月29日（土）	第3回21世紀世界の文明と生存の研究会 ・「エイズと“疫学”」 ・「栄養問題の諸相」
2月1日（火）	拡大3役会
2月3日（木）	編集小委員会
2月17日（木）	理事会・評議員会
2月25日（金）	第6回銀座ナイトセミナー ・「土木技術研究者の生きる」